

現代ギリシャ語の補文標識について

— 知覚動詞構文を中心として —

橘 孝 司

0. 現代ギリシャ語には、補文を導入する主なマーカーが三つある。óti(πως)⁽¹⁾、να、πουである。まず、簡単な例を示しておこう⁽²⁾。

(1) Ισχυρίζομαι óti δεν ενδιαφέρεται για την δουλειά του.

「彼は仕事に興味を持っていないと、私は主張する」

(2) Θέλω να τον δώ.

「私は彼に会いたい」

(3) Λυπάμαι που σας το είπε.

「彼があなたにそれと言ったのは残念だ」

これら三つの補文標識が意味論的にどの様に使い分けられているのか、という問題については様々な文献の中で論じられてきた。本稿の目的は、これらの論を整理統合し、データの検証を通じて、その妥当性を検討することにある。その際、三つの補文標識のいずれとも用いられて微妙な意味的差異を示す知覚動詞構文が議論の中心となる。

1. 主文の述語の意味特徴

三つの補文標識の使い分けの要因となるのは、まず、1) 主文の述語の意味特徴であり、次に、2) 補文自体の意味論的特徴とされている。そこでまず、主文の述語の意味特徴から考察していこう。補文を取る述語の意味論的分類としては Noonan(1985:p.110ff.)に提案されている、汎言語的に適応可能な分類リストが便利であるから、これを現代ギリシャ語の述語分類にも利用することにする。

1.1. óti

Mackridge(1985:p.269)は次のように述べている。

Such clauses(= indirect speech clauses)involve the most common functions of óti and πως,which are used after verbs(or equivalent phrases)of saying, showing,perceiving,knowing,believing etc.

Noonanの述語分類を使えば、óti補文を取る動詞には次のようなものが含まれる。

Utterance Predicate: λέω「言う」 αναφέρω「言及する」 ομολογώ「告白する」

απαντώ「答える」 δηλώνω「明らかにする」

Propositional Attitude Predicate: νομίζω「思う」 υποθέτω「仮定する」

ισχυρίζομαι「主張する」 υποστηρίζω「主張する」

Pretence Predicate: προσποιούμαι「ふりをする」

Predicate of Fearing: φοβάμαι「恐れる」

他方で、Παυλίδης(1982)は語用論的な視点から、補文を取る遂行動詞(performative verb)の構文を分類して、そのタイプと補文標識との関係を論じている。その場合ότιが使われるのは、大部分representative speech act「表示」においてである。representative は、補文内容は真であるという確信を話者が表明する場合である。

1.2. να

Mackridge(1985:p.285)によれば、

The most frequent uses of να are in constructions of the type verb+να+verb.

These uses are those which correspond to most uses of the infinitive in certain other European languages.

Noonanの分類では、ναを取る述語には、次のようなものが入ることになる。

Desiderative Predicate: θέλω「欲する」 εύχομαι「祈る」

προτιμώ「好む」

Causative Predicate: κάνω「させる」 αφήνω「させておく」

πείθω「説得して、させる」 διατάζω「命令する」

Modal Predicate: πρέπει「ねばならない」 μπορεί「してもよい」

Aspectual Predicate: αρχίζω「始める」 συνεχίζω「続ける」

παύω「やめる」 τελειώνω「終える」

Παυλίδης(1982)の語用論的分類では να はdirective speech act「指示」において使われる。directive は話者が聞き手に何かしてもらいたいという要求を表明する場合である。

1.3. που

Mackridge(1985:p.254)では次のように述べられている。

που is frequently used to introduce a clause acting as object or a subject of a verb, or linking some other word, or a phrase or a whole clause to the clause which it introduces.

Noonanの述語分類では、次の述語が含まれることになる。

Commentative Predicate: μετανοιῶναι「後悔する」 λυπάμαι「残念がる」

χαίρομαι「喜ぶ」 στενοχωριέμαι「心配する」

Παυλίδης(1982)の語用論的分析では、*που* は expressive speech act「表出」において用いられる。expressiveでは、話者は、真であると前提されている事情に対する感情を表現する。上記のMackridgeもこの叙実性という点に触れて、叙実動詞 factive verb⁽³⁾、すなわち、その文全体が成り立つためには、補文の表している内容が真であるという前提が必要であり、主文が否定されり、疑問文にされても、補文内容が真であることに変わりはないような動詞(井上1985:p.252ff.を参照)とともに用いられる、としている。

この叙実性という点から *ότι*、*να* をもう一度見てみると、まず、*ότι* をとる述語は補文の内容を前提とはしない。*να* をとる述語では、desiderative、modal は叙実性とは無関係であるが、causative は、補文の真偽性が主文が肯定か否定かに左右される点で含意動詞(implicative verb)であると思われる。つまり、主文が肯定であれば補文内容も真であり、主文が否定の場合補文内容も偽となるタイプの述語と言える⁽⁴⁾。

2. 補文の意味特徴 - 知覚動詞の場合 -

2.1. 知覚動詞 + *ότι*

1. で扱われた述語は、三つの補文標識のうち一つのみと結びつき得るものであった。しかし、同一の主文述語が、二つ以上の補文標識を選択し得る場合がある。したがって、その際の補文標識の決定の要因は補文自体の意味特徴にある。その代表的な例は知覚動詞 Perception verb(*βλέπω*「見る」、*ακούω*「聞く」...)であり、現代ギリシャ語の知覚動詞は三つの補文標識のいずれをも取り得る。一般言語学的に、知覚動詞が直接的な知覚のみならず、認識・理解・推論などの知的作用を示す場合にも使用され得ることは従来より指摘されている(Noonan:p.130-1)。現代ギリシャ語ではこの二つの意味の差を補文標識によって区別することが出来る。

(4) Τον άκουσα που φάναξε βοήθεια.⁽⁵⁾

「私は彼が助けを呼んだのを耳にした」

(5) Άκουσα ότι φάναξε βοήθεια.

「私は彼が助けを呼んだと聞いた」

ότι をもちいることで、たとえ知覚を通じてであるにせよ、cognitive の解釈(「見いだす、推論する」「他人から聞いて知る」)がなされる。他方、*που* によつては immediate perception の解釈(「直接目にする」「直接耳で聞く」)に限られる。それ故、次のように直接知覚ではあり得ない補文内容は *ότι* とのみ結びつく。

(6) Έχουμε δει πιο πάνω ότι η άρνηση μη συνδέεται με την έγκλιση της υποτακτικής.

「我々は上で否定辞 *μη* が接続法と結びつくのを見た」

(7) Άκουσα ότι πέρασε τις εξετάσεις του.⁽⁶⁾

「私は彼が試験に通ったと聞いた」

他のóτιの例を考えてみたい。

βλέπω óτι

(8) βλέποντας πώς ο άλλος εξακολουθεί να μένει αθέατος.

「相手がいつまでたっても姿を現さないのを見ながら」

(9) είδε πώς είχε λιώσει σε δυο τρεις μεριές.

「(カーテン)が二、三箇所破れているのを見た」

(10) Το βλέπω πώς είναι δυο μικροί κύκλοι.

「私はそれが二つの円であるのを見ている」

(11) Και είδε πώς ήταν μόνος...

「そして彼が一人であるのを見た」

(12) Να δεις πώς εκείνος ήταν ο αιτίος...

「彼が原因であるのを知るべきだ」

(13) Είδα óτι τρεις αρχηγοί...βλέπουν πολύ θετικά και με μεγάλη προσοχή την υπόθεση...

「三人の指導者がその事件を前向きに注意深く見ているのを私は見た」

(12)(13)は、補文が抽象的な内容を示しており、cognitiveの例と見なすことが出来るが、(8)-(11)は、対象の直接知覚とも解釈され得る。したがって、óτι 補文は必ずしも知的認識を示すとは限らない。ただし、(8)-(11)は、補文が状態を表している点で共通している。2.2.で να 補文はstative predicate を含み得ないのに対し、óτι 補文にはそのような制約がないことを見るが、上例から考えると、óτι はむしろstative とともに用いられることが多いようである。

2.2.知覚動詞+να

να はπουとともに直接的な知覚を示すが、ここでは Μοσχονάς(1989)にしたがって、να補文の特徴を示してみることにする。

まず、να補文中に現れ得ない述語あるいは名詞句の特徴は、

- a.stative predicate
- b.habituals
- c.generic,attributive

να補文中に現れ得る述語は、

- a.dynamic predicate
- b.specific,referential

(14) α. ?Είδε τον άνθρωπο αυτό να του μοιάζει...

β.Είδε που/óτι του έμοιαζε ο άνθρωπος αυτός...

「その人が彼に似ているのを見た」(状態を示す述語とともにνα は用いられにくいのに対し、ότι, που にはそのような制約はない)

(15) α. Είδα να παίζει τένις η Μαρία. (=μια φορά)

「私はマリアが(一度)テニスをするのを見た」(目前で行われている行為。習慣的か否かは問題ではない)

β. Είδα ότι η Μαρία παίζει τένις.

「私はマリアが(習慣的に)テニスをしているのを見た」(習慣的な行為)

(16) α. Τα άλογα τρέχουν γρήγορα.

「馬(というもの)は速く走る」(この単文では「馬」は種類の総称であるが、次のようにνα補文にすると、「特定の馬」の解釈になる)

β. Είδα τα άλογα να τρέχουν γρήγορα.

「私は(特定の)馬が速く走っているのを見た」

(17) α. Είδα ότι/που ο δολοφόνος της Δήμητρας χρησιμοποίησε μαχαίρι.

β. Είδα να χρησιμοποιεί μαχαίρι ο δολοφόνος της Δήμητρας.

「ディミトラの殺害者がナイフを使うのを見た」(β.の「ディミトラの殺害者」は誰であるのか特定されていなければならない(referential)が、α.ではその必要はない(attributive/referential))

具体的で特定化された事象を提示する場合、να補文が用いられるというこの指摘は非常に有効な説明原理を与えてくれるように思われる。筆者の集めた例で、この点を検討してみよう。

βλέπω να

(18) Είδα τον προϊστάμενο να χαμογελάει.

「上司が微笑んでいるのを見た」

(19) Τον είδα τον άλλον να παίρνει κάτι από το ίδιο ζαχαροπλαστείο.

「もう一人の男が同じ菓子屋で何かを買うのを見た」

(20) Είδε τον ανακριτή να πίνει ήπυχα ήπυχα τον καφέ του.

「捜査官がコーヒーを静かに飲むのを見た」

(21) Εκείνη την στιγμή, είδε κάποιον να βγαίνει από την τουαλέτα.

「その瞬間誰かがトイレから出て来るのを見た」

(22) Είδε κόσμο να τρέχει προς την άλλη πλευρά της λεωφόρου.

「人々が大通りの反対側へ走るのを見た」

(23) Δεν τον είδα τότε να στέκεται κι αυτός στην ουρά, αλλά δεν ανησύχηρα.

Ήμουν σίγουρος πως μας ακολουθούσε σαν ίσκιος.

「彼が列の中に立っているのは見えなかったが、心配はしなかった。彼が我々を影のように尾行しているのを私は確信していたからである。」

(24)Κείνη τη στιγμή, είδε τον άλλον, που από ώρα είχε χάσει τα ίχνη του, τον είδε να τους ακολουθεί από κάποια απόσταση.

「その瞬間彼はもう一人の男の姿を見た（ずいぶん前からその男の姿を見失っていたのだったが）、その男が距離をおいて彼らの跡をつけているのを見た」

(25)Κάθε φορά που βλέπω μικρά παιδιά ή κάτι γυναικούλες ερειπωμένες ή τυραγνισμένα γεροντάκια να τριγυρνάνε με σοκολάτες ή τσατσαρές από δρόμο σε δρόμο,

「子供たちやみずぼらしい女たちや疲れきった老人らがチョコレートだの楡だのを手に通りから通りへと歩いているのを見る度に」

(26)Την είδε να κατακρακυλάει προς την υπόνομο,

「ボールが溝の方へ転がっていくのを見た」

(27)είδα τους χοντρούς τοίχους να χωρίζονται στα δυο...

「私はその分厚い壁が二つに割れるのを見た」

(28)Τον είδα να δέρνει το παιδί.

「私は彼が子供を殴るのを見た」

(29)Τον είδαν να χτυπάει τον αστυφύλακα.

「彼らは彼が警官を叩くのを見た」

(19)-(29)のνα 補文はいずれもdynamic な状況を示している。(18)(23)の解釈は微妙であるが、具体的で特定化された状況、という点ではνα の条件に合致する。この意味対立に即して考えるならば、次のような例は非常に示唆的である。

(30)Στο σαλονάκι βλέπω τρεις τέσσερις κοπέλες κι άντρες που κοιμόντουσαν κι αυτοί χάμα και κάποια στιγμή βλέπω τη Ζωίτσα να κοιμάται.

「応接間で私は三四人の娘たちと男たちが床で眠っているのを見るのだが、あるときゾイツァが眠っているのを目にする」

(31)では、主動詞も補文の動詞も同じであるが、不特定の「娘たちと男たち」についてはπουが用いられているのに対し、叙述の中心である「ゾイツァ (=女優名)」を特定の時点で知覚する場合はνα が用いられており、上述の意味論的差異が明確に現れている。

2.3. 知覚動詞+που

最後に知覚動詞がπου をとる場合について考察したい。2.2. で述べられたように、που 補文には意味論的制約は見られなかった。筆者の例では、να 補文同様、dynamic の例のみが見いだされた。

βλέπω που

(32)Το τρενάκι πήγαινε σιγά και δεν ήτανε πρόβλημα να βαδίζεις πλάι του. Τον είδα που ερχότανε. Είχα χάσει τα ίχνη του από ώρα, αναρωτιόμουν αν ήτανε

πάντα από κοντά ή είχε χάσει εκείνος τα ίχνη μας.

「汽車はゆっくりと進んでいたのその側を歩いて付いていくのには問題はなかった。

彼がやって来るのを私は見た。ずいぶん前から彼の姿を見失っており、ずっとそばに居るのか、それとも、彼の方でも我々の跡を見失ってしまったのだろうかとは自問していた」

(33) Τον είδε που ρχόνταν γρήγορα και που της ένευε.

「彼が急いでやってきて彼女に合図するのを見た」

(34) Το είδα που έπεφτε.

「私はそれが落ちるのを見た」

そこでνα 補文との差異を見いだすためには叙実性の点から考えてみる必要がある。一般に、知覚動詞は叙実動詞ではなく、補文の真偽性が主文の肯定・否定に左右される点で含意動詞(implicative verb)であると思われる。井上(1985:p.253)は、より正確に半含意動詞(if-predicate)としている。すなわち、主文が肯定の場合は補文が真であることを前提とするが、主文が否定の場合、このような前提はない⁷⁾。現代ギリシヤ語の知覚動詞でこの特徴が観察されるのはνα 補文の場合である。例えば、Φιλιππάκη-Warburton & Βελούδης(1984:p.160)では、

(35) Δεν είδα να κολυμπά.

「私は彼が泳ぐのを見なかった」

(36) Δεν είδα ότι/που κολύμπησε.

「私は彼が泳いだのを見なかった」

において、(36)は

(37) Κολύμπησε, αλλά δεν είδα.

「彼は泳いだ、しかし私はそれを見なかった」

とパラフレーズできるが、(35)はできない、と述べられている。Hesse(1980:p.83)でも

(38) Δεν τον άκουσα να φωνάζει.

I didn't hear him shout(and did he?)

(39) Δεν τον άκουσα που φώναζε.

I didn't hear him shouting (but now I know that he was shouting)

これらは、主文が否定の場合、να 補文の内容は真とも偽とも言えないのに対し、ότι/που 補文では真である(前提されている)ということを示していると解釈できる。πουは1.3で述べられたように、叙実動詞とともに用いられて補文内容が前提されていることを示すが、知覚動詞とともに用いられる場合も、その補文内容は前提されているといえる。したがって、知覚動詞は ότι/που をとるか να をとるかによって、factive の解釈を受けたり、implicative(if-predicate)の解釈を受けたりする。

ところで、(36)ではπουとならんでότιもfactiveと結びつくとされている。しかしπουと

ὅτιの前提の性質が異なっていることが、これもΜοσχονάς(1989)に示されている。

(40) Βάν εἶχες δει ὅτι/που ερχόταν, τότε θα ἔπρεπε να εἶναι ἤδη ἐδῶ.

「彼がやって来るのを君が見たのなら、もうここに来ていなければならないはずなのだが」

(41) Αποκλείεται να ἔτρεχε τόσο γρήγορα. Βάν εἶδες ὅτι/που ἔτρεχε, ἀπόδειξε το!

「彼がそんなに速く走ったはずはない。走っていたのを君が見たのなら、それを示してみろ」

ὅτι補文の前提は文脈によって取り消すことが可能であるのに対し、πουではこれが不可能である。取り消すことが出来る以上、ὅτι 補文は前提されているとは言い難い。(40)(41)では、補文内容が真であると話者が述べているわけではなく、主文の主語が主張しているにすぎない。従って、すでに前提されている補文内容にはπου が用いられ、主語の主張を述べる場合はὅτι が使われる、と言える。ὅτι はある確信を表明する場合に用いられるという点を1.1. で見たが、知覚動詞と結びついた際にも同じことが観察される訳である。

知覚動詞における補文標識の選択についての以上の考察を表にまとめてみるならば、次のようになる。この表より三つの補文標識の各々が持つ特徴が明らかになる。ὅτι は知的認識内容を示す点で他の二つと異なり、να は動的で特定の状況を表す点で他の二つと異なり、που はすでに前提されている補文内容を導入する点で他の二つと異なっている。

να	immediate perception	dynamic -stative -habitual	referential specific -attributive -generic	implicative (より正確には if-predicate)
ὅτι	cognitive (immediate perception)	(stative)		+factive +presuppositional
που	immediate perception	制約なし		factive presuppositional

さらに、1. で取り扱った、知覚動詞以外の動詞における補文標識の選択を以下に図示してみる。

να	desiderative p. causative p. modal p. aspectual p.	directive s.a.	+factive implicative
ὅτι	utterance p. prepositional attitude p. pretence p. p. of fearing	representative s.a.	+factive +presuppositional
που	commentative p.	expressive s.a.	factive presuppositional

(p.= predicate, s.a.= speech act)

両者に共通している選択基準はimplicative、factiveといった談話上の概念である。したがって、結合する主文・補文の意味とは別に、補文標識自体の意味の中核をなすのはこのような談話上の概念概念ではないかと推測されるのであるが、より詳しい検討は今後の課題としたい。

(本稿は第21回西日本言語学会(台風の為中止)で研究発表予定であった内容に加筆、訂正したものである。)

註

- (1)ὅτι と πως は文体論的に使い分けられる、とされているからここでは両者を一括して ὅτι として扱うことにする。
- (2)本稿の例は注記のない限り、筆者が新聞、雑誌などから集めたものである。
- (3)(4)簡潔に図式化すれば次のようになろう。

叙実述語 factive predicate

含意述語 implicative predicate

(ex.「後悔する」)

(ex.「成功する」)

主文 補文内容

主文 補文内容

肯定 真

肯定 真

否定 真

否定 偽

(5)例はΧριστήδης(1982:p.137)より。

(6)例はΧριστήδης(1982:p.138)より。

(7)半含意述語 if-predicate (ex.「させる」「見る」)

主文	補文内容
肯定	真
否定	--

参考文献

Βελούδης,Γ.(1985)"Η δήλωση του χρόνου στα να-συμπληρώματα."

MEΓ.6,pp.183-198

Βελούδης,Γ.& Φιλιππάκη-Warburton,E.(1984)"Η υποτακτική στα Νεοελληνικά."

MEΓ.4,pp.151-168.

Μοσχονάς,Σπ.(1989)"Συμπληρωματικές προτάσεις και ρήματα "αισθήσεως σημαντικά"

MEΓ.9,pp.315-336

Παυλίδης,Θ.(1982)"Προσλεκτικοί ενδείκτες στα Νεοελληνικά." MEΓ.2,pp.245-268

Τζάρτζανος,Α.(1989) *Νεοελληνική σύνταξις*. Θεσσαλονίκη.

Φιλιππάκη-Warburton,E.& Βελούδης,Γ.(1984)"Η υποτακτική στις συμπληρωματικές προτάσεις." MEΓ.5,pp.149-167

Χριστίδης,Α.Φ.(1982)"Ότι/πως-που:επιλογή δεικτών συμπληρωμάτων στα Νεοελληνικά." MEΓ.2,pp.113-177

----(1983)"Παρατηρήσεις στη σύνταξη των "αισθήσεως σημαντικών" στα Νεοελληνικά." MEΓ.4,pp.115-125

----(1986)"Το μόρφωμα που σαν αναφορικός δείκτης." MEΓ.7,pp.135-144

Hesse,R.(1980) *Syntax of the Modern Greek verbal system:the use of the forms, particularly in combination with θα and να*. Museum Tusculanum Press, Copenhagen.

Kiparsky,P.& Kiparsky,C.(1970)"Fact." *Progress in linguistics. A collection of papers*. ed.by M.Bierwisch & K.E.Heidolph. pp.143-173

Mackridge,P.(1985) *Modern Greek Language*. Oxford Univ.Press.

Mirambel,A.(1955)"Subordination et expression temporelle en grec modern." *BSLP*.52,pp.219-253

Noonan,M.(1985) "Complementation." *Language typology and syntactic description* II ed. by T.Chopen,pp.42-140

Vande Ostijne,C.(1985)"Perception and presupposition." MEΓ.6,pp.155-174

MEΓ. Μελέτες για την ελληνική γλώσσα.(1982-) Θεσσαλονίκη.

井上和子(1985)『変形文法と日本語(上)』大修館書店

稲田俊明(1989)『補文の構造』大修館書店